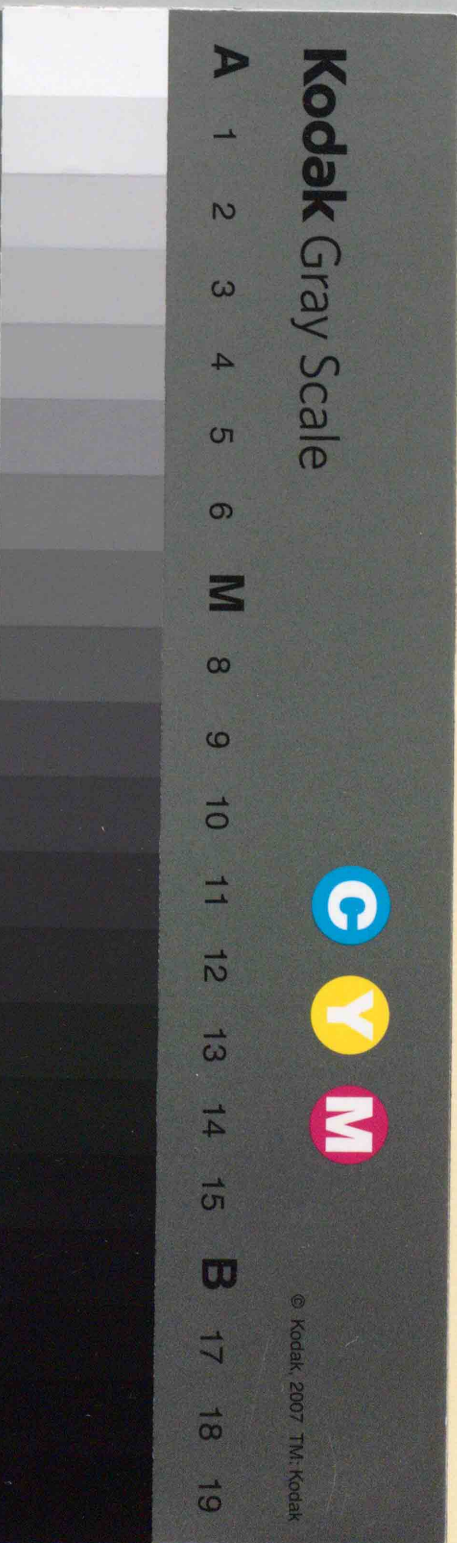
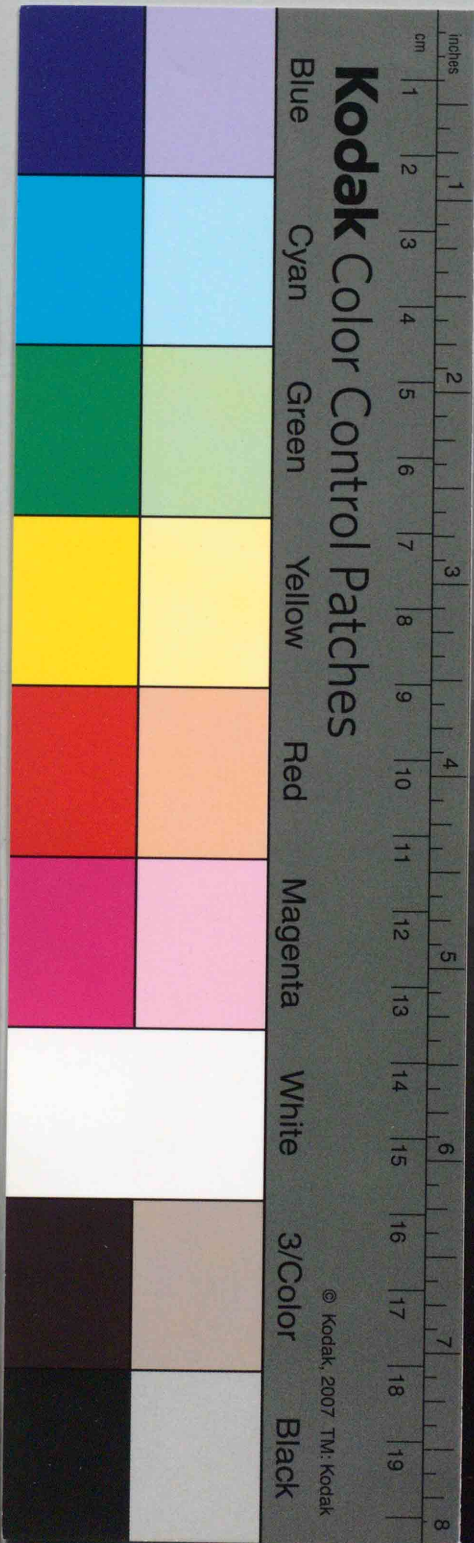
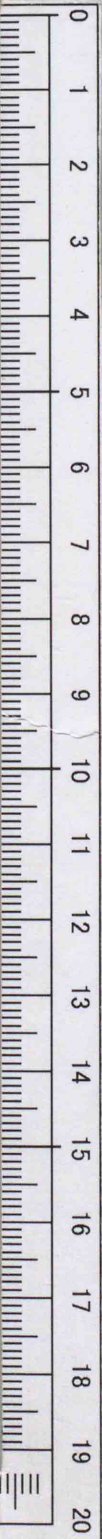


訂
中華國語讀本
落倉直文編
卷一

3759
0c8
資料室

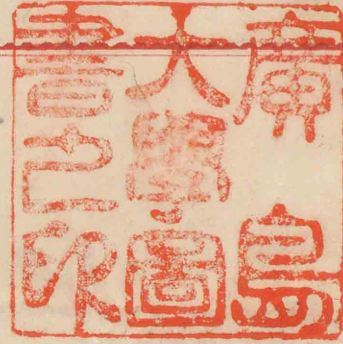


42111

教科書文庫

4
8/0
41-1903
2000.0
39934





塩本廣一

訂正中等國語讀本 卷一 目次

一、觀艦式	一
二、戸毎の國旗	七
三、故郷	一〇
四、自然の音楽	一四
五、花と蟲	一七
六、馬鈴薯	二二
七、小笠原島通信	二七
八、平壤の曲(新體詩)	三一

訂正中等國語讀本卷一 目次

九、威海衛の陥落その一	三三
一〇、威海衛の陥落その二	四一
一一、海外の一知己	四八
一二、功臣の末路その一	五六
一三、功臣の末路その二	六一
一四、初度の歐洲行	六五
一五、水浴	七二
一六、奇遇	七八
一七、汽車の旅	八六
一八、勸學(今様)	九〇

一九、トマス、エヂソン	九一
二〇、少年時代の苦學	九八
二一、ブンゼンの逸事	一〇七
二二、ボアソナード氏を送る詞	一一二
二三、アラビア馬その一	一一六
二四、アラビア馬その二	一二一
二五、森林	一二五
二六、天の橋立	一三〇
二七、初旅(新體詩)	一三五

卷一目次終

訂正中等國語讀本卷一



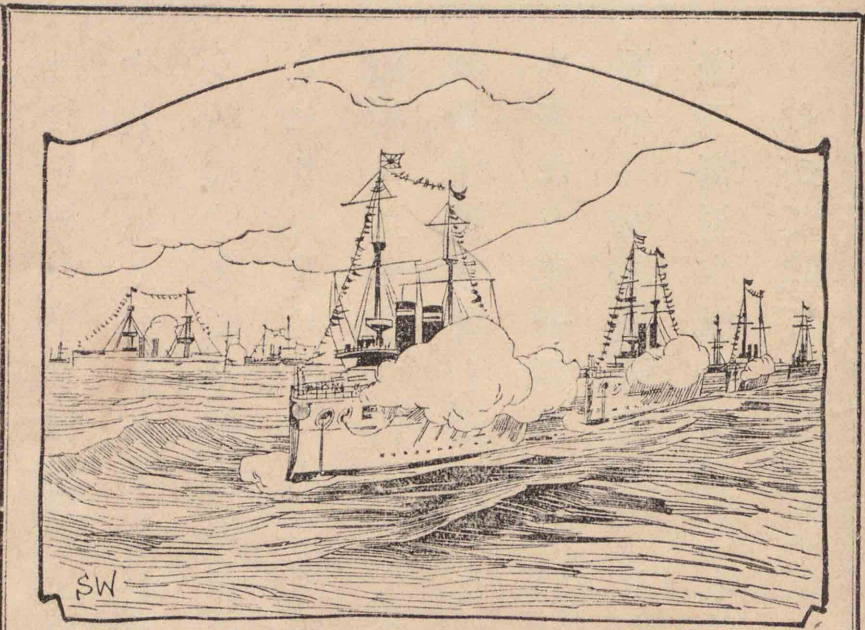
一、觀艦式

明治三十六年四月十日、我が睿聖文武にまします
天皇陛下には、まさに、その大演習を終へたる、我が帝
國軍艦の精銳をば、神戸の沖に集め給ひて、盛大なる
觀艦式を行はせられたり。

これよりさき、陛下には、千代田の大宮を出でさせ
給ひて、舞子の行在所に御駐輦ありけるが、この日、午

前七時五十分、御料の汽車に召させ給ひ、八時二十五分、神戸の停車場に着御ましましぬ。かくて、そこに、文武百官の奉迎を受けさせられて、御料の御馬車に召され、去つ去つと、メリケン波止場に向はせ給ひぬ。御通路の兩側には、かねてより、けふの渡御を拜せむとて、數萬の臣民、列を正して、並み居たるが、陛下には、御心地よげに、そをみそなはしつゝ、過ぎさせ給へり。

車駕、やがて、波止場につかせ給ひぬ。かくて、陛下には、去ばし、便殿に入らせ給ひて、御休憩あらせけるが、九時三十分、そこを出てさせ給ひて、汽艇に召させ給



ひ、けふの御召艦と定れる浅間艦に向つて、進ませ給ひぬ。この時、浅間艦をはじめ、参列の諸艦、皆一齊に、二十一發の皇禮砲を發ちて、祝意を表せしが、白煙、濛々として、海上をこめ、砲聲、殷々として、山嶽に震ひ、壯快、實に、いふべくもあらず。

この日は朝のほど海上、靄深く、たちわたりて、四面、少しも見え分かざりしが、八時過ぐる頃より、やうやう、晴れゆきて、やがて、陽春のこゝちよき日よりとなれり。見渡せば、大小の軍艦、七十餘隻、第一列より第四列に至るまで、肅然として、列を正し、皆、一樣に、旭日の軍艦旗を翻し、満艦飾をなして、陛下の御親閱を待ち奉れり。第一列の外方には、別に、また、英、佛、獨、露、伊、諸國の外國軍艦數隻、參列せり。その全面の區域の廣き、豎三海里半、横一海里半と注せられぬ。

やがて、陛下には、汽艇より、御召艦に移らせ給ひし

が、同艦にては、喇叭を吹奏して、奉迎の禮を行ひ、忽ち、天皇旗をば、高く、檣頭に掲げぬ。十時二十分、御召艦、徐に、その拔錨の準備をなすや、陪觀者に乗せたる、宮古、千早、吳等の諸艦船は、供奉の列に入り、夕霧艇は、御先導の任務を帯びて、先頭に立ちぬ。同じく三十分、御召艦、供奉の諸艦船、ひとしく、錨をあげて、進航し始めぬ。

御召艦は、のどやかなる海風に、天皇旗を翻して、長蛇の如き黒煙を艦尾に曳きつゝ、徐に、波を蹴て、式場に入り、かくて、順次、各列の間を通過せらる。陛下には、始終、上甲板の艦橋なる、玉座にたゞせられ、龍顔、こと

に、うるはしく、一々、御親閱せさせ給へるが、御召艦通過の際は、參列の諸艦、皆順次に、登舷の禮を行ひ、各艦かはるがはる、奉賀を一唱せり。やがて、御召艦は、最後の列を過ぎて、豫定の錨地に就きけるが、この時、諸艦奉賀を三唱し、十一時過ぐる頃、式、全く、はてぬ。

式後、陛下には、陪觀の外國公使、及び、内外の海軍武官に、謁を賜ひ、御召艦、及び、出雲艦に、陪觀の諸官を召して、御宴を賜ひぬ。この御宴に先ちて、陛下には、左の深厚なる勅語を、我が艦隊に下し給へり。

朕、親しく、艦隊を閲し、また、演習の成績に考へ、深く、

進歩の著明なるを嘉す。今や、宇内の大勢、海軍日新の運に會せり。汝等、それ、益奮勵、以て、朕が望に副はむことを努めよ。

と。我が海軍の將士、皆、感奮せざるはなし。

かくて、陛下には、御順路、恙なく、舞子の行在所に還御ましましぬ。

二、戸毎の國旗

明治五年の頃にやありけむ、たのれ、亞米利加より歸りて、間もなきほどなりき。祝日の前日にあたれる

日ある司に出でて、四五人の同僚と、祝日に關する事どもなど語りけるついでに、たのれ、彼の國にてなすが如き様に、國旗を、戸毎に掲げたらむには、賑はしくてよかりなむ」といへば、それよかるべし」といふ。さて、いかにせば、そのならはしになるべきぞ」と問はるゝより、これに答へて、これらの事は、公より申し付くべきことにもあらねば、われら先づ、その旗を作りて、門に掲げねかむ。さらば、餘の人、これに倣ふべし」といひけるに、その座に居合せたる人々、然らば、明日は、その言の如くすべし」とて、別れぬ。

さて、たのれ、家に歸りて、麻の布片に、朱もて、日の丸を畫きて、掲げけるに、見習ふ人、次第に、多くなりて、幾程もなきに、たしなべて用ゐる事となりしのみか、今は、國旗を賣る店さへあるやうになりぬ。たのれ、年頃人に益ありと思ふ事を勧めつる事、數々なりしが、いつも、聞く人すらなき程なりしに、さして、益あるべしとも思はざりしこの事の、何程の勞もなくて、一般のならはしとなれるは、われながら、不思議に堪へざるなり。(細川潤次郎著なゝし草)

三、故郷

我が故郷を慕ふ情は、われひと共に、變らぬことに
て、東西の別あるべくもあらず。されば、何處の國人も、
皆、我が故郷の美を説かざるはなく、一たび、郷關を出
づれば、堪へがたき望郷の念にうたるといへり。

嘗て、青が島といふ南洋の一孤島に、火山爆發のこ
とありき。火光、焰々として、天を焦し、はては、石を飛ば
し、灰を降らしければ、島中の人畜、これが爲に、悉く、斃
れ盡きて、僅に、十餘人の、八丈島に逃るゝを得たるの
み。去かも、この十餘人は、遂に、その故郷を忘るゝこと

能はず、火のやむと聞くや、喜び勇みて、また、その恐る
べき噴火の島に歸れりといふ。

占守の地は、千島の内にありて、窮北不毛の地なり。
たゞ、氷雪の累々として、相依れるを見るのみなれば、
開拓使廳は、土人に令して、南の方、色丹島に移らしめ
たり。色丹の地は、樹林、乏げく、河川、その間に流れ、鳥獸、
その陰に集り、田園の收穫、また、頗る、多きところなり。
さるを、遷徙の土人等、皆、この新樂土を喜ばずして、歸
心、矢の如く、遂に、再び、その窮北不毛の故島に逃れ歸
れりといふ。

往年、米國シカゴ博覽會の舉ありし時、その中に、エスキモー土人の部落を置き、數多の土人を伴ひ來りて、そこに住ませたることありしが、彼等は、この文明繁華の地にありて、衣食に、住居に、無限の快樂を享けながら、猶も、故郷の空、忘れがたく、幾度か、その氷山雪塊の殊境に逃れ去らむことを企てたりといふ。

まことに、もろきは、人の情なり。他郷の樂土も、故郷の住みよきに比ぶれば、物の數にもあらず。その口を極めて、故郷の美を説き、郷關の樂を説くも、たもへば、やむを得ぬことなるべし。

されど、これらは、たゞ、單に、故郷を戀しといひ、郷關を忘れ難しといふに過ぎず。人の自然の情、深く、賞するに足らざるべし。我等は、更に、我が故郷に向つて、まことの愛情をさぐべき務あることを思はざるべからず。いかにせば、我が故郷の名を、大にすべきか。いかにせば、我が故郷の名を、世界にも輝し、後の世にも傳ふることを得べきか。これ、その郷人の、朝夕に、忘るべからざる務なり。コルシカの一孤島は、その島民ナポレオンによりて、不朽の名を、青史に輝したり。三河の國名は、その三河武士によりて、ゆかしき名を、國史

に垂れたり。これらは、まことに、その郷に忠なる好例にあらずや。

抑も、郷を愛する念は、やがて、國を愛する心なり。國を愛する心は、やがて、我が金甌無缺の國體を、千古に傳ふべき道なり。一郷に人たり、一國に民たるもの、その郷國を慕ふ情を進めて、更に、その郷國を愛する情を盛にせざるべからざるなり。

四、自然の音楽

聲の調子に、一定の高低ありて、節面白く鳴り響く

を音楽といふ。琴、笛、三味線、ピアノ、オルガン、唱歌などの音楽は、通例いふ所の音楽なり。されど、かゝる人為の音楽の外に、自然の音楽ともいふべきものあり。鶯、雲雀、松蟲の聲など、これなり。その他、心を留めて、萬物の聲を聞けば、松風にも、水の聲にも、自然に、美しき志らべはあるなり。鶏も歌ひ、鳥も鳴く。雀、雲雀、山がらなど、百鳥の聲、皆、音楽なり。鳶の、高き天に歌ひ、鳩の、低き梢に鳴く、これも、また、音楽なり。或鳥の音は、笛の如く、或鳥の音は、琴の如く、また、或鳥の音は、胡弓の如し。ひぐらしの聲に、夕日沈めば、松蟲、鈴蟲、機織、こぼる

ぎなど、鳴き出づ。或は、金の板を叩くがごとく、或は、銀の鈴を振るが如し。蛙、蟬、蜂など、皆、それぞれに、樂を奏す。草を吹く風、樹を吹く風、空高く吹く風など、風も、各、その音色を異にす。或は、琴の如く、或は、笙の如く、或は、ヒチクキ筆箒の如し。

水の音樂は、更に、面白し。泉の水の湧き出づる音は、琴、尺八、ピアノの曲とも聞くべく、落葉をくゞる細き流の音は、琵琶、月琴の調にも似たり。軒の雨垂を、豆太鼓の音に喩へむか、瀑布の、軽どろどろと落つるは、大太鼓の響にも喩ふべからむ。たゞ、彼の大海の波の音の、

物すごく、いさましきに至りては、また、喩ふべきものなし。(坪内雄藏)

五、花と蟲

花と蟲とは、まことに、離るべからざる密接の關係を有するものなり。われらは、彼の美しき胡蝶の羽毛を見る毎に、直に、愛らしき花の瓣を聯想することゝ禁ずる能はず。されば、古より、胡蝶を指して、花の精などいひ傳へたる話も、少からず。

さても、花の、蟲に似通ひたるは、ひとり、その色のみ

にあらで、その形さへもよく相似たるものあり。トリニダード島に産するある植物の如きは、その美麗なる色、その翩々たる形、最もよく蝶に似たり。されば、土人、これと呼びて、植物界の蝶といふ。この種の植物の中には、なほ種々の花ありて、その形、蠅の如く、蜂の如く、或は、また、蜘蛛の如きものもあり。

蟲の、花を愛することの強きは、よく、人の知れる所にて、その花の陰にとまり、花瓣の中に入り、時としては、終日、立ちも去らで、戯れつゝあるは、われらの、日常、目撃する所なり。

さて、も、蟲類の、かくまで、花を慕ふは、抑も、いかなる故なるべきか。その色の美しく、その香のゆかしきことも、一の原因なるべけれど、その重なる理由は、主として、花の中の蜜にあるなり。蜜は、蟲類にとりては、かくべからざる唯一の滋養分なり。彼等は、この蜜を吸はむがために、絶えず、花のかげを追ひくるなり。

花の、蟲類に、わける、その愛、實に、至れり盡せりといふべし。美しき色を以て、これを誘ひ、ゆかしき香を以て、これを招き、更に、これに與ふるに、甘味の蜜を以てす。時としては、また、その色の似通ひたるによりて、蟲

類をして、わのが陰に隠れて、敵の襲撃を免れしむることさへあり。

さるにても、蟲類は、いかにして、このなさけ深き花の恩に報ぜむとかする。我等は、こゝに、興味ある現象の伏在せるものあるを見て、深く、造化の妙技に感歎するものなり。

抑も、花は、實を結ぶための機關にして、その花瓣の中には、雄蕊と雌蕊とありて、雄蕊の上部に附着せる花粉、成熟して、雌蕊に觸るゝ時は、こゝに、一の作用起りて、果實の生ずるものなり。かくて、同じ花瓣の中に

ある雄蕊の花粉を受くる時は、その實、小さく、他の花なる雄蕊の花粉を受くる時は、その實、大にして、充分に、成熟するものなれば、勢、他の花粉を待たざるべからず。他の花粉が、いかにして相通ふかといふに、そよ吹く風の、それが媒をなすこともなきにはあらねど、多くは、彼の蟲類の媒介によるものにて、これ、即ち、蟲の花に報ずる道なり。

蜂の、蜜を蓄ふるに熱心なることは、古來、幾多の話説を、東西の歴史に残せり。胡蝶の、花に戯るゝ狂態、また、幾度か、詩人の口に上れり。されど、これらの蟲類と

花との密接なる關係に至りては、世人の注意を引くことなくして、近世に至れり。さて、この兩者の關係は、まことに、有機界に於ける、注意すべく、味あじふべき肝要なる現象なり。

六、馬鈴薯

馬鈴薯は、歐米各國にて、上下貴賤の別なく、一日も、かくべからざる副食物として、食卓の上へのほせらるゝものなり。この馬鈴薯につきては、その發達の歴史の中に、さまざまのれもあろき話説、残れり。

このものは、もと、英吉利の雄將、サー、フランシス、ドレークといへる人、亞米利加の新世界より齎し歸りたるものにして、遂に、佛蘭西に傳り、獨逸に移され、かくて、歐洲大陸の各國に傳播せられたるなり。

その時、佛蘭西に、パールマンチエーといへる人あり。馬鈴薯の効用の著しきを見て、さまざまの苦心と幾多の金錢とを費して、去きりに、その繁殖をはかり、わが知れる豪農の人々に勧めて、まづ、その畑に植ゑしめたり。されど、その味のよからざるより、農民等は、いたく、これをきらひて、こは、豚の食物たるべきものな

りなど、いひあへり。

その後、パールマンチーは、巴里の近郊に、土地を買ひて、そこに、おほくの馬鈴薯を植ゑぬ。人々は、これを見て、さても、心なき人かな。何人か、また、彼の、豚いもを求めむとするものあらむとて、笑へり。やがて、收穫の季節となりしが、その耕作地の光景は、いかに、人々の眼を驚したるぞ。周圍には、隙間もなきまでに、堅固なる柵、設けられ、要所要所には、番兵と、おぼしきもの、立ち並べり。その肩にせる銃器のいかめしさ、その腰にたばさめる太刀の、おそろしさ、人々は、たゞ、うち驚く

ばかりなりき。そのみかは、その近傍の村落には、いかめしき布告さへ出されぬ。その布告に曰く、

何人たりとも、パールマンチーの畑より、馬鈴薯の一塊を取り去りたらむものは、重罪に處せらるべし。この貴き作物は、たゞ、王公の食卓にのみ上せらるべきものぞ。決して、常人の食物に供せらるべきものにあらず。

と。こゝに、おいて、人々の好奇心は起りぬ。ついで、嫉の心さへ起りぬ。かくて、國王の食卓に上るべき、このものゝ、いかに、美味なるべきかを思ひぬ。嗚呼、かゝる美

味のものを試みざるは、美食の名を得たる、我等佛人の恥辱にあらずや、など、いふものさへ出できぬ。

かくて、夜な夜な、ひそかに、その畑を窺ふものありしが、いつか、番兵の眼をぬすみ、幾塊かの馬鈴薯をぬすみ取りて、急ぎ、わが家に逃げ歸れり。これを傳へ聞きて、一人加り、二人従ひ、はては、數百の農民、群集して、押し寄せ來れり。今は、大膽にも、番兵に向つて、襲撃を加へ、鋏を以て、馬鈴薯を掘り出し、それを車に積みこみて、一齊に、凱歌を唱へつゝ、勇み進んで、運び去れり。さて、互に、これを食ひて、われらは、王公と、その食を共

にすなど、いひて、皆、その戰勝を祝せり。

番兵は、翌朝、その出來事を具申して、パールマンチエーに訴へたり。それを聞きたるこの義人は、泣いて、わが志の遂げられたるを喜べりとぞ。

かくの如くにして、この馬鈴薯は、それより、それに傳りて、遂に、くまなく、全國に傳播したり。かくて、パールマンチエーの義心とその頓才とは、長く、國民の口碑に残りたりといふ。

七、小笠原島通信

一書拜啓仕り候ふ。今回出發につき、萬事御配慮を蒙りし段、深く、謝し奉り候ふ。五月十五日、午後二時半、横濱出帆、途中兩日程、風雨強く、少々、困難仕り候へども、常に、追手の風にて、船の走る事、一時間、平均八海里位の割にて、同月廿二日、當小笠原島に着仕り候ひき。着後、風なく、たまたま、あるも、南風にて出帆するを得ず。いづれ、近日、出發の運に相成るべしと存じ候ふ。

當島は、よほど、有利の地なるやう、これまで聞き及びしかども、實際は、大に、これに異り、瘠地にして、かつ、山坂ねほく、平地は、なほ、だ、稀なれば、決して、望あると



ころにあらず。たゞ、氣候、内地と異にして、パイナップル、芭蕉の實なども出來、また、咖啡、タコノ木、そのほか、内地の人の目に新しきものあるが故に、かくは、申し觸したる事と思はれ候ふ。

小生は、これまで、隨分、海運の事など、議論致し候へ

ども、船に乗りたる事は、極めて稀にして、この度の如きは、船中、随分、困難を極め候ひき。志かし、今日は、氣力、全く、回復致し、向後の航行は、懼るゝに足らず。歸朝までには、ひとかどの船乗と相成るべく、樂み居り候ふ。蒸氣船と風帆船との得失如何は、實に、海國たる日本のためには、重大の問題と考へられ候ふ。小生、これまで、海事に通ぜず、風帆船を輕視せしが、今日までの實驗にて、非常に、宜しきものなることを、知り候ふ。畢竟、この航海を完結せば、日本人は、いかなる船舶を以て、通商するが適當なるべきかの決斷を得べしと存

じ候ふ。

當今、當島の暖氣は、日中、八十二三度にて、随分、暑けれど、夜に入れば、涼風吹き來て、眞に、爽快を覺え候ふ。沿岸に、油桐といふ樹あり。葉、茂りて、鬱々たり。この島にて、暑を凌ぐを得るは、全く、この樹のために候ふ。小生、身體、强健にして、内地に居りし時よりも、氣分、常に、愉快なり。御安心下されたく候ふ。勿々頓首。(田口卯吉)

八、平壤の曲 (中村秋香)

大砲小砲鬨のこゑ、

天やくづるゝ地か砕くる、
あなめざましや、
れも志ろや、
大浪なみ翻かして衝つき入る皇軍、
雪ゆき顔かほを打うつてみだるゝ清兵、
萬歳唱ばんざいふる勝鬨かちどは、
山をうごかし谷をゆする、
あなこゝちよや、
いさましや、
平壤城頭へいりやうじやうけぶりのひまに、

ほのぼの見ゆる朝日の御旗。

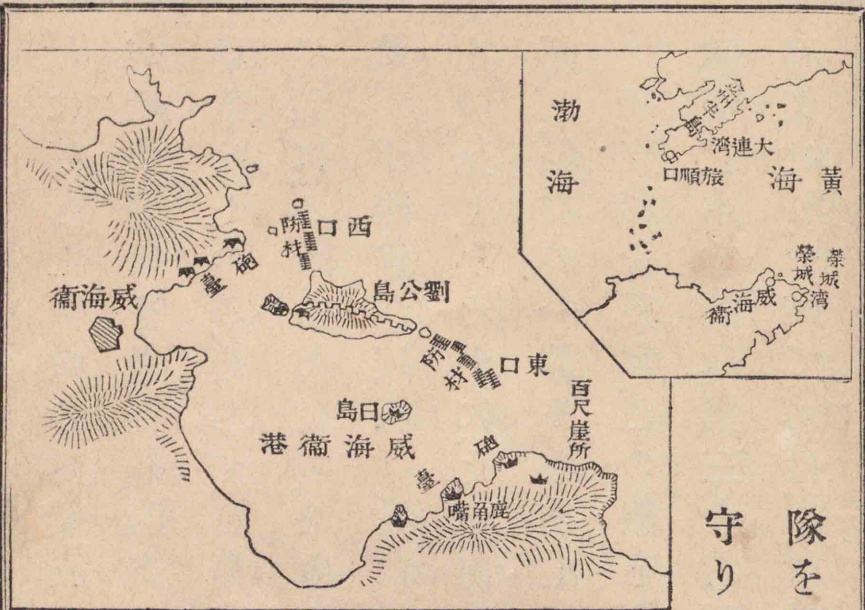
九、威海衛の陥落その一

我が海軍は、敵の艦隊を、黄海に破り、陸軍もまた、旅順口を陥れ、金州半島、悉く、我が手に落ちたり。敵艦は、退いて、なほ、纔に、威海衛を保てりしが、我が軍は、更に、進みて、それを陥れむと、大連灣にて、頻に、その準備をなせり。

かくて、陸軍は、海軍に護送せられて、明治二十八年一月二十五日、榮城灣より上陸し、直に、榮城を陥れて、

威海衛に進めり。敵の水師提督丁汝昌は、みづから、定遠に乗りて、來遠、濟遠の二艦を率ゐ、海岸に近づき、陸上の兵を助け、頻に、巨砲を發ちて、大に、我が軍をなやませり。されど、我が軍の猛烈なる吶喊のために、陸上の敵兵、遂に、支ふること能はず、諸砲臺を棄て、悉く、潰走せり。我が海軍の諸艦より、選拔せられたる水兵五十餘名は、直に、上陸し、陸軍に代りて、各占領砲臺の守備に任じ、その備砲を應用して、海上なる帝國艦隊と相應じ、劉公島に向つて、砲撃を加へたり。

この四面重圍の中にありて、丁汝昌は、巧に、その艦



隊を操縦し、よく、掌大の孤島を守りて、屈せず、益、勇敢なる抵抗を持続したり。ことに、港口には、すべて、防材を敷

設したれば、我が艦隊も、進むによしなく、まづ、それを破壊せむとて、二月三日の夜、六號水雷艇を、威海衛の東口に進航せしめたり。我が艇、漸く、防

材に達せし頃、敵の哨艇たる七隻の水雷艇は、直に我が艇の潜行を發見し、四方より、これを圍みて、砲丸を雨射せしのみならず、日島砲臺よりは、速射砲を發ちて、頻に、これを防げり。されど、我が艇員は、自若として驚かず、四邊を凝視し、遂に、防材の一端にわいて、航路を發見し、ひそかに、その内に入り、三たび、擲爆薬を使用し、防材の一部を破壊して歸れり。

伊東司令長官、この報を得て、大に喜び、第一水雷艇隊、第二水雷艇隊、第三水雷艇隊の司令を、旗艦松島に召集せり。やがて、余は、今、諸君に命ずるに、港内に突入

して、敵艦を撃沈すべきことを以てす。抑も、水雷艇の港灣に突入するは、各國海軍の、未だ、嘗て、試みたることなき者にして、實に、難中の難事たり。願くは、諸君、一命を、國家に捧げて、帝國海軍の名を、世界に輝されよ。といふ。司令等は、快く、これを諾し、艇に歸りて、悉く、書信を焼き、衣服を改めて、靜に、夜の更くるを待てり。

五日、午前三時、月落ち、海暗きに乗じて、第二、第三の水雷艇隊十隻は、徐々として、東口に進み、防材を越ゆるにわよび、急に、全速力を出して、港内に進入せり。港口なる敵の哨艇は、はやくも、それと知りて、火箭をう

ちあげけるが、それを見て、敵の各艦、皆、水雷防禦の用意をなせり。

敵の旗艦定遠にては、丁汝昌、その參謀と共に、艦橋に出でて、暗中进行して、四方を望み居しが、我が艇隊のちかづくを見て、志きりに、榴霰彈を發ち、また、機砲を發てり。こゝに、我が艦隊の一隻は、艦首の方より、二隻は、艦尾の左右より、まつしぐらに、突進して、はやくも、數百メートルの近距離に迫れり。この時、一彈は、我が九號艇に命中し、一團の汽煙、闇を破りて、上騰せり。されども、數秒時を出でざるに、轟然たる響と共に、定

遠の艦體、はげしく、震動し、瀑の如き水柱、空中に迸りて、艦上にそゞぎかゝれり。これ、まさしく、我が一發の魚形水雷、その艦底に命中して、爆發したるなり。艦員は、防水戸を閉鎖せむとして、縦横に馳せ廻り、必死となりて、防禦につとめたれど、渦卷く潮水は、艙口より迸り出でて、下甲板の浸水、既に、一尺に達し、艦體、遂に、傾斜しはじめぬ。丁汝昌は、はや、これまでなりと思ひて、急に、錨を揚げて、淺瀬に乗り上げしめ、乗員をして、悉く、上陸せしめたり。あゝ、清國無雙の堅艦として、武威を、東洋に振ひ、黃海の戰には、我が本隊にあたり、威

海衛にありても、また防禦の中心となりて、屢我が軍をなやましたる定遠も、遂にはかなき最後を遂ぐるに至れり。

我が軍はこの勢に乗じて、第二の攻撃を企て、五日の夜、第一艇隊の五隻、東口より闖入せむと志たるも、敵の警戒嚴なれば、まづ第二、第三艇隊をして、ことさら、西口より突入する状を示さしめ、六日、午前四時、月の落つるを待ちて、靜に、防材附近に達せり。敵は、昨夜の攻撃に懲り、頻に、電氣燈を旋回して、海面を照し、各艦かはるがはる、發砲して、相警戒せり。我が艇隊は、

一時、悉く、防材に乗り上げしが、漸く、港内に入り、奮戦して、皆、水雷を發射し、遂に、來遠、威遠、寶筏の三隻を撃沈し、各艇、一兵をも損せずして、恙なく、本隊に歸れり。

一〇、威海衛の陥落その二

我が水雷艇の突入、その効を奏せしかば、伊東司令長官は、この機に乗じ、總艦隊を擧げて、敵軍を攻撃せむとす。二月七日の早朝、艦隊は、二に分れ、本隊、及び第一游撃隊の八隻は、劉公島の東北より、その東端砲臺に向ひ、第二游撃隊、及び第三、第四游撃隊の十四隻は、

東口の東方より、日島砲臺に向ひ、共に、單縱陣を布きて、進航せり。やがて、戰鬪の號音と共に、各艦の大橋頭には、開戦を示せる大軍艦旗をかゝげしが、兵員は、これを見て、皆、その部署に就けり。滿艦、肅然として、一人の言語を交ふるものなく、たゞ、波浪を蹴る轉輪の轟々たる響を聞くのみ。

やがて、劉公島に向へる我が本隊、六千メートルの距離に近づくや、敵の砲臺、まづ、發砲し、我も、また、頻に、猛撃を加へたり。砲臺は、忽ち、黄烟につゝまれて、着弾處々に、爆發し、閃光、四邊を射て、壯快、いふべからず。日

島に向へる一隊も、また、直に、戦を開き、陸上の我が軍も、百尺崖附近の各占領砲臺より、日島を砲撃せり。

鎮遠以下の敵艦は、頻に、發砲して、砲臺を助け、兩軍の砲聲、殷々として、海陸一面、硝煙の中に没し、日光、ために、朦朧たり。さるほどに、日島の火薬庫、我が砲彈を受けて、爆發し、その砲臺は、遂に、また、用ゐること能はざるに至れり。

九日、敵艦靖遠、我が占領砲臺の一なる、鹿角嘴砲臺より發てる彈丸のために、遂に、沈没せり。志かのみならず、この日、敵兵、自ら、半ば沈没せる定遠を破壊する

など、また、戦ふ意なきを見て、丁汝昌、憂慮、措く能はず、自ら、彈丸雨注の中に出でて、大に、決するところありきといふ。

この時、劉公島にありし敵の陸兵は、海軍營に迫り、軍艦を奪ひて、逃走せむことを企て、水兵も、また、既に、士官の命を拒みて、その任務を勤めず、島中の混亂、實に、名狀すべからず。こゝに、艦隊の諸將校、こもごも、提督の室に行き、全艦隊の水兵、離叛して、用ゐること能はざるを訴ふ。丁汝昌、即ち、一歐人を遣し、兵士等に向ひて、汝等、須らく、最後の、一快戦を試み、刀折れ、彈盡き

て後に、敵に降るべしと、いはしむ。されども、兵士等、遂に、命を奉ぜず。

十一日、劉公島東端の巨砲、また、我が砲彈のために破壊せられ、丁汝昌、百計、全く、盡きて、遂に、降を、我が軍門に乞はざるべからざるに至れり。

十二日、午前八時三十分、清國砲艦鎮北は、白旗を前檣に掲げ、港口を出でて、我が本隊に近づき、軍使、廣丙艦長程璧光、我が旗艦松島に至りて、丁提督の書を、伊東司令長官に呈せり。その書に、

汝昌、はじめ、艦破れ、人盡くるまで、決戦せむと思ひ

しかど、今や、空しく、百千の生靈を奪ふに忍びず、殘艦、わよび、砲臺を貴軍に獻じて、降を乞ふ。願くは、兵士と人民とをして、生を完うして、各、その郷に歸らしめむことを。

とあり。伊東司令長官は、快く、その降を容れ、更に、酒果を軍使に託して、これを、丁提督に贈り、その苦戦の勞を慰む。

十三日、程璧光、喪服をつけて、再び來り、我が司令長官に謁し、悄然として、提督は、閣下の情誼に感泣し、事既に足れりとなし、總兵劉步蟾、統領張文宣と共に、藥

を仰ぎて、節に殉ぜりといふ。我が將士、これを聞きて、皆、その義烈に感じ、涕泣せざるものなし。伊東司令長官は、特に、命じて、儀式の外は、奏樂を禁じ、以て、弔意を表せり。

十七日、我が總艦隊は、悉く、威海衛港内に入り、收容軍艦を合せて四十餘隻、いづれも、旭旗を翻し、旗艦松島に起れる、嚟曉たる君が代の奏樂に和して、各艦の兵士、一齊に、萬歲を呼ぶこと三回、山雲、ために、裂け、海波、また、ために、立たむとせり。(小笠原長生著帝國海軍史論)

一一、海外の一知己

一夕、勝海舟翁を氷川邸に訪うた。ところが、はなしは、たまたま、丁汝昌のことにたよんだが、翁は、口を開いて、丁汝昌は、われが海外の一知己だつたが、日清戦争の時に、とうとう、自殺して去まうた。當時、われは、今昔の感にたへず、病氣を推して、こんな文章を書きかけた。

二十八年二月十二日、丁汝昌、その率ゐるところの軍艦に、降旗をかゝげて、われに降るといふ。ある人、その可否得失を論じて、余が意見を問ふ。余、思ふむ

ねありて、答へず。その後、兩三日、丁は、いよいよ、降るべき順序を終へ、自刃して死せりといふ。余、彼の心中を思ひ、嘆息、わくこと能はず。思へば、彼が、我が國に來りし時、余が家を尋ねきて、共に、相語れり。

こゝまで書いたところが、胸中の感慨と、病餘の衰弱とで、頭痛が去だしたものだから、やむを得ず、それなりにしたが、今、そのつゞきを、口で話さう。

その時、丁が、支那當時の海軍についていふには、今日、我が國の海軍は、いかにも、見所がなく、御恥かしき次第だが、拙者は、唯、將來に期する所があつて、いさゝ

か、みづから奮勵して居るばかりだ。拙者は、曾て、李氏の命を受けて、二百名の生徒を連れて、英國へ留學し、同國の士官について、少しく、海軍の事を學び、歸朝の上、この二百名の生徒と共に、やうやう、今日の海軍を創設したけれども、これは、たゞ、兒戯に過ぎない。その事は、李氏も承知と見えて、今日の海軍は、何の役にも立たない、たゞ、今後十年を期して、大成すべきのだと、常々、われわれにいうて居る。拙者は、曾て、貴著海軍歴史を讀んで、君が、幕末から、王政維新の際にかけて、海軍を經營せられた閱歷と、偉勳とを承知し、拙者が、今

日の境遇にくらべて、志きりに、敬慕致し居ると、いうた。丁のいふところは、その語は、甚だ、謙遜で、その望は、甚だ、遠大であるから、たれも、感心して、海外に、一知己を得たのを喜び、いろいろ、こなたの考をも話した。

その後、軍艦に招かれて、提督の禮で待遇せら



れ、いろいろ、丁寧な響應を受けたが、われは、一首の和歌を、一口の寶劍に添へて、彼に贈つた。そして、艦内、残る隈なく、見物したが、一體の事が、なかなか、整頓して、日常用ゐる品などは、一つも、外國製のを用ゐず、支那製ばかり用ゐて居た所などは、實に、感心したよ。今後、も、すべて、かゝる心がけが、肝要であるというたら、彼は、よく聽き入れた。

われと丁との間には、こんな關係があるものだから、日清戦争の時分には、たもひは、始終、北洋艦隊の上に馳せて、敵ながらも、その消息が氣にかゝつた。また、

あの時の聯合艦隊の司令長官であつた伊東中將も、昔、神戸で、われの塾に居た緣故から、一生一度ともいふべき晴の舞臺に上つたからは、どうか、日本海軍の名譽と、一身の手柄とを、立てさせたいと思つて、當時、われの胸は、あちらを思ひ、こちらを思ひ、殆ど、千々に碎けたよ。

然るに、威海衛の海戦は、敵味方とも、このうへなき名譽を輝し、世界の海戦史上に、ひと花咲かせたと聞いて、われは、實に、嬉しかつた。伊東中將の事は、いはぬ。丁が、あの時の處置は、實に、一點の非難すべき所もな

く、海戦上に、一箇の新事例を教へたというてよい。陸戦の時、あの様な場合に處する例は、これまで、いくらもあつたけれど、世界に、海戦といふ程の海戦が、昔からなく、従うて、あんな場合も、少なかつたから、これに處する方法の如きも、倣ふべき先例がなかつた。丁の處置は、實に、戦闘力を失うた艦長が取るべき模範を示したばかりでなく、蕭條たる海戦史の秋の野に、一點の紅花を點じたのだ。

凡そ、人間が、何事にか激した時には、死ぬには、譯もないことだらう。併し、よくよく、事局の前後を達觀し

て、十分に、善後の策を立て、然る後、從容として、死に就くのは、決して、容易の事ではあるまい。丁汝昌の境遇の如きは、部下には、數年來、苦心養成した所の、他日、支那海軍の要素たるべき、かの二百名の秀才があり、傍には、いろいろ、面倒な事をいひいだす、雇外人があり、これ等の處置をつけねばならぬ。寧ろ、斃るゝまで奮戦しようかといふと、十年素養の二百名を殺さなければならぬ。それでは、降参しようかといふと、自分の良心は、どうしても、許さない。そこで、丁は、沈思熟考、支那海軍の將來を慮り、自分の面目をも立て、かつは、雇

外人への義理から、一身と軍艦とを犠牲にして、顧み
なかつたのだ。その心の中は、實に、憫むべきではない
か」というて、翁は、涙ぐまれた。そのはなしのあとを聞
きたくも思つたが、日も、全く、暮れたゆゑ、暇乞して、歸
途についた。(勝海舟談話筆記)

一二、功臣の末路その一

維新の功臣の中にて、その最なるものは、誰なるか
と、問はゞ、幼童も、猶、西郷隆盛なりと、答へむ。隆盛は、ま
ことに、豪傑の士なり。陸軍大將兼參議たりしが、かの

征韓論の行はれざるがために、職を辭し、遂に、鹿島に
かへれり。こゝに、世の人、こは、たゞごとにはあらじ、必
ずや、大事れこらむと、さわざあへり。佐賀の亂、熊本の
亂、秋月の亂、皆、この隆盛を頼みて、起れるなり。されど、
隆盛は、更に、顧みず、ひとり、私學校に學生を集め、武を
練り、兵を磨きて、徐に、時の到らむを待てり。

政府は、鹿島なる隆盛の舉動の、たゞならぬを知り、
かしこなる砲兵屬廠、及び、造船所の彈藥、器械を、大阪
へ移さむと試みたり。こは、これ、明治九年の暮つ方な
りしが、あくる年の一月三十日、私學校黨、砲兵屬廠、造

船所の彈藥、器械を掠め、また郵便汽船をわしとせめて、兵を擧ぐべき準備をなせり。たまたま警視廳の警部中原某等二十一人、麿島に歸省せり。隆盛等、それを聞者なりとし、大に政府にたゞすところあらむとて、兵一萬五千を率ゐ、二月十五日、麿島を出で立つ。縣令大山綱良、官金を出して、その軍資にあてたり。

この時、天皇陛下は、西京にたはせしが、麿島、なにとなく、ただやかならぬ由をきこしめして、大御心を痛めさせ給ふこと、一方ならずやがて、海軍大輔河村純義、内務少輔林友幸を遣して、そのありさまをたゞと

しめ給ふ。純義等、彼處に至り、大山綱良にあひて、種々諭すところありしが、聽かず。かつ、暴徒、兵器を携へて、その艦にせまるなど、謀叛のさま、明なりしかば、直に、歸りきて、その旨を奏す。こゝに、有栖川熾仁親王を征討總督とし、陸軍中將山縣有朋、海軍中將河村純義を參軍とし、野津鎮雄、山田顯義、曾我祐準、三浦梧樓、大山巖、三好重臣の各少將、及び、大警視川路利良、陸軍大佐高島鞆之助等をして、各旅團の兵を率ゐ、二月二十日、東京を出で立たしむ。

この時、熊本鎮臺の司令長官は、陸軍少將谷干城を

り。賊軍、熊本をよぎりて、東の方へ上るときこえしかば、ところどころに、兵を遣して、その備をなす。二十一日、熊本鎮臺の兵、川尻にて、賊にあひ、こゝにはじめて、戦を開きたり。賊軍、たちちに、熊本城に迫り、四方より、烈しく攻む。城兵、よく戦ふ。されど、他に、援兵もなかりしかば、遂に、重圍の中に陥れり。

二十四日、征討總督の宮、大阪を出で立たせ給ふ。二十六日、本營を、福岡に置き、進みて、熊本城を援はむとす。賊、これを、植木、木葉のところどころに迎へて戦ふ。官軍、利あらず。さらに、兵を増して、南關、または、高瀬川

に戦ひしが、賊、遂に、引き退きぬ。官軍、勢を得て、田原坂を攻む。賊軍、よく戦ひ、兩軍の死屍、山の如し。三月三日、官軍、吉次越より進み、賊將篠原國幹を斃す。されど、賊軍、少しも屈せず、かたく、田原坂を守りて退かず。

一三、 功臣の末路その二

陸軍中將黒田清隆、柳原前光と共に、勅を承りて、薩摩に下り、島津久光を諭し、大山綱良を捕ふ。歸途、清隆は、征討參軍となり、肥後の八代より上陸して、賊の後を衝きしかば、賊は、前後より、兵をうけて、逃げまよふ。

こゝに、田原坂、植木、山鹿、みな、官軍の手に歸せり。

山田顯義、川路利良等、黒田清隆と、兵をあはせて、熊本城をすくはむと、八代より、北をさして進む。この時、熊本城のありさまは、いかに。賊にかこまるゝ事、五旬、糧食つき、彈丸つきて、また、すべきやうもなかりき。なみなみの人々ならむには、出でて、賊に降りたらむを、谷干城をはじめ、將士、皆、死を以て守れり。三月も過ぎて、四月になりぬ。その八日、宇土の方にあたり、遙に、砲の音せしが、陸軍少佐奥保鞏、一隊を率ゐて、城を出て、十重に、二十重に、圍める賊軍をきりぬき、遂に、宇土

に出でて、官軍に合す。こゝに、はじめて、城中のありさまを聞くを得たり。陸軍中佐山川浩、一隊を率ゐ、こゝはまた、外部より賊軍の中をきりぬきて、遂に、熊本城に入りぬ。こゝに、はじめて、連絡を通ずるを得たり。官軍、益、振ひ、賊軍、愈、衰ふ。熊本、の賊、うち破られ、日向と鹿島とをさして、引きあげぬ。人吉、重岡、出水、都城、佐土原、延岡など、日々、戦争絶えず、薩、肥、日、隅、豊の山野、砲聲の聞えざるところもなし。

七月二十四日、官軍、都城を取り、ついで、佐土原、延岡の諸城を陥れぬ。この時や、賊の將士、多く、討たれたれ

ど、猶萬人に下らず。賊將、桐野利秋、別府新助、村田新八等、そを纏めて、長井、熊田などの各地を保ちて、よく戦ふ。八月十八日、官軍大舉、四方より、賊軍を圍む。隆盛、利秋、夜のまぎれに、急に、官軍の陣を衝く。官軍、支へ得ざる程に、彼は、早くも、圍を破りて、西に走りぬ。官軍、追ひ討ちたれども及ばず、賊、遂に、鹿島に入りぬ。

かくて、城山にたて籠り、皆死を極めて、官軍の攻めこむを待てり。官軍、急に討たば、將士を失ふこと、多からむと、只、四方を圍みて、迫らず。かくすること、十日あまり、九月二十四日、夜の明けはなる、頃、大舉して、進

み討ちしに、隆盛をはじめ、利秋、新八、皆、自殺せり。あはれ、維新の功臣、遂に、城山松の下露と消えぬ。みづから招きたる事とはいへ、又、一滴の涙なきを得ざるなり。

一四、初度の歐洲行

文久年間、徳川幕府は、竹内下野守、松平石見守、京極能登守三人をば、特命全權公使に任じ、歐洲なる條約諸國に赴きて、聘問の禮を修めしめたり。余も、また、幸にして、その員末に列することを得たるが、これ、まことに、われらが、初度の歐洲行なりしなり。

一行の乗船は、特に英國より派遣せられたる軍艦と定りけるが、英國公使よりは、屢使を以て、なるべく、一行の人数を減じ、その携帯の荷物をも節略せらるべし」と注意せられたり。されど、何事につけても、格式といふこと、やかましかりし當時の事なれば、この注意は、なかなか、採用せらるべくもあらず、非常の減員をなしたりといふ一行は、なほ、三十人にあまれり。殊に、その荷物に至りては、將軍家より、各國の帝王宰相にあてられたる贈品、一行の携帯品等、積みて、山をなせり。また、その出發の支度につきては、全く、歐洲の

事情を知らざりし當時の事として、後日の笑話となりしもの、少からず。

まづ、駕籠、持槍、甲冑、挾箱の類は、非常の英斷にて、持參に及ばずと決したれど、なほ、三使には、その用意なくしてはとて、手槍、及び、鞍、鐙の類をば、持參せられたり。それより、筆墨紙は、いふに及ばず、白米、醬油、香の物の類に至るまで、悉く、これを用意したり。さて、味噌は、腐敗し易きものなれば、通常の品にては、物の用にもたつべからず、いかゞすべきかとの事にて、評議、まぢまぢちなりしが、我等は、切に、その無用なるべきを説きた

れど、勤向き以外の儀に、さして口は、一切相成らずと、一言の下に吐りつけられたり。さては、いかになりゆくべきかと見てあれば、ある軍學者の説とかにて、甲斐の信玄が、軍用として傳へたる、萬年味噌の秘傳なりといふ法に従ひて、俄に、製造せらるゝ事となれり。かくて、それをば、瓶數箇につめて、持参したりけるが、笑止や、さすがの萬年味噌も、熱帶の温氣には敵し難く、香港と新嘉坡との間にて、はやくも、腐敗して、その異臭、堪へ難く、遂に、空しく、海中に投入し去りぬ。

次に、また、をかしかりしは、草鞋の詮議なりき。諸國

遍歴の長途に、至る處、必ず、鐵道あり、馬車ありて、われらの便に供せらるべしとは、信じがたし。たとへば、山岳原野の渺茫たる間にて、車も通はざる如き境に至らば、いかにすべき。よしや、三使の乗馬のみは、尋ね得とするも、一行三十餘人の乗馬は、いかに、西洋なればとて、到底、これを得べき道は、あらざるべし。さる場合に、あたりて、第一に、なくてかなはぬものは、履物の用意なり。かりにも、西洋の靴など、用ゐむは、この上もなき、神州の恥辱なりとて、専ら、草鞋の用意にとりかゝりしが、これも、ある軍學者の説とかにて、甲州流の軍

用茗荷草鞋といふものを、千足ばかり造られたり。もとより、船中にては、その用をなればとて、まづ、郵船に託して、佛國のマルセイユに廻送し置きたりけるが、到着の後、一足も用ゐずして、空しく、同所に留め置き、歸路に及びて、その取捨とすてを、佛國の接待官に依頼して別れたり。

かくて、一行は、文久元年十二月を以て、いよいよ、品川沖より、英國の軍艦に乗り込みたり。まづ、長崎に立ち寄りて、石炭を積み入れ、同二年正月元日の曉に、長崎を出帆して、香港へと向ひぬ。英國軍艦にては、特別

の注意を以て、一行を待遇し、まきりに、その便利をはかりくれたれど、飲食よりはじめて、衣服、坐臥に至るまで、全く、その風尚を異にせるをいかにかせむ。船長、士官等は、日本使節の、いかにも、不作法にして、少しも、規律なきに困じて、その、少しく、規律を守らむことを望み、一行は、また、船長、士官等が、瑣細ささいの事までの干渉をいとひて、甚しき壓制なりと叫び、互に、その主張を固守して、彼我の意志、すこしも、疏通せざりければ、その間に立ちたる、われら通辯、翻譯係のものは、たゞ、その奔命につかるゝのみなりき。

さて、一行は、香港より、諸所に寄港し、スエズを過ぎ、まづ、佛國に着し、ついで、英國に渡り、かくて、順次、歐洲諸國を巡歴し、諸國の案内に應じて、歐洲文明の事物を見つくしたれども、一行中の二三人を除く外は、別に、益することもありしが如し。汽車中の失敗、宴席上の疎忽、今より、追想するも、ひとり、うちゑまるゝ事のみ多かり。福地源一郎著懷往事歴

一五、水浴

「すこやかなる精神は、すこやかなる身體に宿ると、

歌ひし、羅馬の國民は、今より、二千數百年の以前にわいて、盛に、水浴を行ひき。歴史の記載するところによれば、チベル河の流に入りて、塵垢を洗ひ、游泳の技をも練習せしこと、明なり。今も、われらが、繪畫、彫刻などにて見る、彼等の軀幹の偉大なると、筋肉の鐵石の如きとは、蓋し、偶然にあらざらむ。

我が國民が、古來、清きを好む性ありて、沐浴を怠らざるは、喜ぶべし。彼の西洋各國に見る如き、悪性の皮膚病すくなく、又、その種類のすくなきことは、これがためなりとは、醫家のひとしく、いふところなり。

沐浴に種類多し。溫度を以ていへば、冷水浴、温水浴、湯浴を分つべく、成分を以てすれば、淡水、礦泉、海水を數ふべし。湯浴の溫度は、度をすごすべからず。人の體溫は、三十、七度内外なれば、大かた、それより、高かるべからず。低かるべからず。

冷水浴は、神經の末端を刺戟して、抵抗力を増さしむ。されど、刺戟の強きに過ぐるものなれば、虛弱なる人には、すゝめがたし。さる人は、夏の頃より、毎朝、手拭を、冷水に浸し、それを絞り、これにて、摩擦するをよしとす。そのはじめにありては、煩しきを訴ふらめど、常習

とならば、なほ、鹽嗽の廢し難きが如きに至らむ。

古來、溫泉の賞美せられしは、我が國にても、道後溫泉の發見が、遠く、上代にありしにても、知られなむ。これに反して、海水浴の行はるゝに至りしは、輓近の事なり。

游泳を知るものは、激浪に乗りて、身體の運動を營むが故に、尋常の浴以外に、特種の効あり。游泳を知らざるものといへども、遠淺に立ちて、小波のやはらかなる刺戟にあふ時は、海氣の刺戟と相待ちて、皮膚の神經を強くするものなり。

海水浴場として、最も適する地は、南に海を控へ、北に、山を負へるところとす。そは、四時、季候の劇變なきを以てなり。海は、荒海なれば、浪、強くして、危険なり。礫石多き時は、入るに堪へず。

入水の時間は、人の體質により、又、天候により、一定し難けれども、不快を感じるまでに及ぶは、わろし。度數も、朝夕の二度をよしとす。かの日中、海に飛び入り、又、やけたる砂を踏むが如きは、始めて、海を見たる類の人には、勧め難し。單に、海濱の生活のみにて、効あるべければ、さる事は、強ひて、行ふにも及ばざらむ。

海水浴の効あるは、浴、そのものが効あるのみならず、周圍の地勢が、無限の保養を與ふるを以てなり。見よ、紅塵萬丈の中に、雲を眺めし眼は、忽ち、地平線上の帆を數ふるに至り、オゾンに富みたる海氣の呼吸は、胸廓の、一志ほ、増大せるかを疑はしむ。浪にたはれて、貝を拾はむか、島山を望みて、歌を詠まむか、たのづから、胸襟の爽快なるを覺えむ。思へば、誰も、都門の塵を避けて、松風濤聲、相和するあたりに、夏の日を送らむこと、のぞましきかぎりならずや。

一六、奇遇

むかし、獨逸のライン河のほとりに、ブラウンといふ一農夫住めり。性まことに温厚にして、持てる田地も、少からざりしかば、人にも親まれて、何不足なく、いと安樂に、その日を送りけるが、ある年、思ひがけなくも、河水、充溢して、すは、洪水よ」といふ間も、たく、濁浪、襲ひ來て、見る見る、家屋も、水中に没せられむとせり。思ひも設けざりし事なる上に、夜半の出來事なりければ、一家の狼狽は、一方ならず、家財道具、何ひとつ取り出さむ違もあらで、纔に、身を以て免れたり。家には、四

人の子供ありしが、幸に、皆無事なりと思ひつるに、よく見れば、末の子の、搖籃の中に、寢かしけるが、ひとりあらざりけり。夫婦は、足ずりして、泣き悲みしかど、かひあるべくもあらず。かくて、愛犬のボチも、この時、また、見えずなりぬ。

この村より三十里ばかり下りたる河岸に、ケルンといふ村あり。その邊は、川幅も廣ければ、この洪水にも、河水は、さまで、溢れもせざりければ、村民等は、皆岸のほとりに立ちて、水流の恐しき様を眺めてあり。やがて、家の流れ來るあり。つゞいて、器具などやうのも

のも、流れ來けるが、はては、人畜の死骸の流れ來るも見ゆ。その中に、浮きつ沈みつ、流れ來る搖籃のありけるが、側には、一疋の犬ありて、それを護りながら、泳ぎ來れり。人々、不思議の事に思ひて、様々に、工夫をこらしつゝ、辛うじて、引き上げたり。見れば、生れて、なほ、半年には過ぎじと思はるゝばかりなる男の童の、その中に、すやすやと、眠れるがあり。

たまたま、見物せる人々の中に、葡萄酒の間屋を業とせる夫婦あり。二週間は、かり以前に、當歳のひとり子を失ひし折なりければ、その妻は、いとほしさのあ

まり、急ぎ、その子を抱き取りて、我が乳房を含ませつるに、何とも知らで、快げに、寢入りぬ。そのまゝ、家に連れて歸りけるが、日にまして、かはゆき情のみまさりゆき、今は、なかなか、手離し難きまでになりぬ。やがて、夫婦のものは、さきに死せし子の名をそのまゝに、ダニールと命名して、掌中の珠と、いつくしみ育てけり。犬も、そのまゝに飼はれて、よく、家人に馴れ親み、ことに、ダニールとは、最も、仲好き友達なりき。

月日は、夢の如く過ぎ行きて、ダニールも、いつか、十三の歳を迎へぬ。性、頗る、伶俐にして、學業も、人に優れ、

をりをりは、父の代理を勤むるやうになれり。かくて、家業、日々に榮え、取引も、月を追うて、手廣くなり行き、はては、ライン河通の小蒸氣船をさへ買ひ入るゝまでになれり。

ある日、ダニールは、父の代理として、その發着所にありけるが、そこに着きし船の中に、一人の老夫ありて、人々の出で去りし後も、ひとり、船に留りて、上陸せず。ダニール、いぶかしく思ひて、何故に、上陸せぬぞと、いへば、老夫は、答へて、このあたりは、宿料、高くして、われらには堪へ難ければ、不自由ながらも、船に留るな

りと、いふ。その様の、いかにも、いたはしかりければ、ダニールは、葡萄酒など與へて、かれこれと勞りたり。

この時、ダニールのあとにつき來し、例のポチは、頻に、この老夫の顔を、うちまもりてありしが、急に、嬉しげに吠えかゝりて、その肩に飛びつき、その足にまつはり、はては、頸を舐り、手を嘗めなどす。老夫は、いたく驚ける様なりしが、やがて、ポチなりしかと、叫びぬ。犬は、尾をふりたてゝ、益、叫べり。ダニールは、いかなる事ぞと、あきれて、老夫に問へば、老夫は、涙ながらに、十三年前の事を物語れり。

されど、歲月の、いたく、隔りたる事なれば、ダニールも、老夫も、猶、いまだ、そのまことの父子なることは、え悟らざりき。されど、ポチは、二人の間をかけたまはりて、離れむともせざりしかば、ダニールは、遂に、この老夫をつれて、家に歸りぬ。

何故とも知らぬ家人等は、見も馴れぬ客を見て、驚きけるが、ダニールが、今日の出来事を物語りけるまに、養父母も、あはれなる事に思ひて、いそぎ、老夫を一室に招き入れ、親しく、その履歴を聞きしに、ダニールのまことの父なること、疑ふべくもあらざりけれ

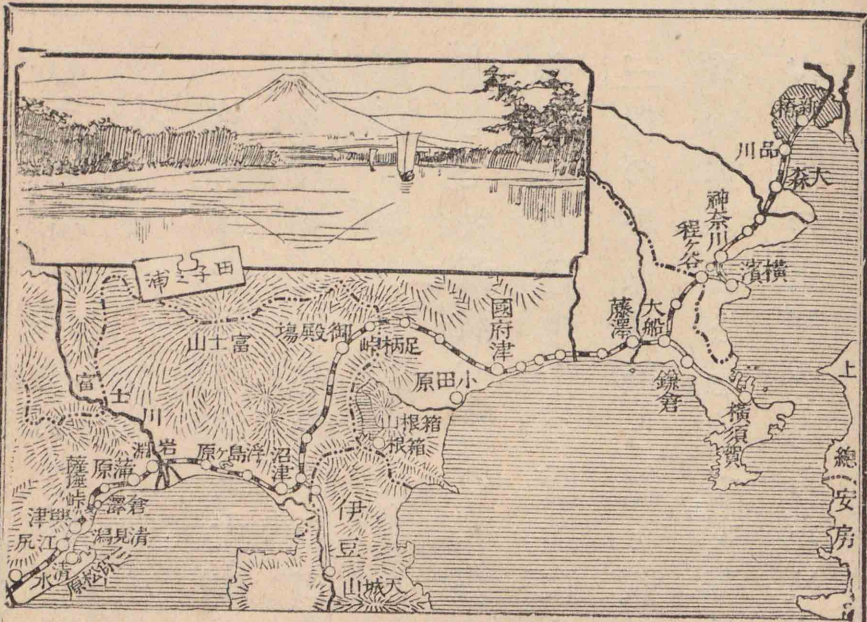
ば、こなたよりも、ダニールを救ひ上げし折の事ども、詳しく、物語りしに、老夫は、夢かとはかり驚きて、うれしさのあまり、涙に咽びぬ。ダニールも、こゝに始めて、我がまことの父なることを知り、われにもあらで、すがりつき、互に、抱き合うて、暫時、ことばもなかりき。

こゝに、ダニールは、改めて、この家の養子となり、二三日の暇を乞ひて、我が故郷に歸り、なつかしき母と兄弟とに對面して、絶えて久しき、懷舊の情を語り盡したりとぞ。父子兄弟の喜實に、いかばかりなりけむ。

一七、汽車の旅

八月廿日、午前十一時過ぐる頃、新橋より汽車に乗りて出發す。折しも、初秋の事なれば、品川、大森の海面、薄霧、たち渡りて、安房、上總の山々も見えず。神奈川、程ヶ谷など、うち過ぎて、はやくも、大船の停車場につきぬ。こゝは、横須賀の方へも行くべき追分なれば、上下する人、集散する車、ことに多かり。

藤澤、國府津の邊を走るに、鎌倉、小田原の往事など、れもひいてられて、史乗も、心に浮び、變遷も、目に見ゆるこゝちす。足柄、箱根は、海道に名高き峻嶺なれど、今



訂正中等國語讀本卷一

は、居ながら、わりのぼりするなど、ひらけゆく世の賜にして、越えなやみし古人の紀行も、あらぬそらごとのやうなり。のぼりつめしところは、御殿場の停車場なり。このあたりに、承久の難に殉ぜられし中納言宗行卿の墳墓のありと聞けど、

心に、史乗をたどりて、車の窓より、空しく、林を眺むるのみ。

沼津、富士川の邊、富士山、高く懸り、浮島が原、廣く横れり。松風は、源平對陣の古を語るが如く、水聲は、群鳥驚起の昔を答ふるに似たり。懷舊の情、車輪と共に轉迴して、岩淵、蒲原等の驛路は、いつか走りすぎ、汽車は、倉澤の西、薩埵山の隧道に入る。隧道の暗を出づれば、三保の松原、海原と緑を競ひて、夕波に浮び、伊豆の天城、青雲と高さを比べて、落日に映じ、清見潟の絶勝は、古今、その奇觀をあらためず。

興津の停車場にて、西よりの汽車を待てる程に、清見寺の鐘響き渡りて、日、全く暮れたり。江尻の海岸を行くに、月、いづ。漁火は、月に、光を奪はれて、遠く、有渡の海に漂ひ、汽船は、沖に、烟を残して、近く、清水の港に向ふ。清見潟の廣遠なる景色も、月影と共に、玻璃の小窓に入り來れるなど、げに、再び、逢ひがたき佳宵なり。昔、雪舟とて、畫を善くするものありけり。渡唐せし時、清江觀月の圖を描出して、かの國人の目をわどろかししが、爾後、かの國人の、我が國に來遊する者は、必ず、一度、この地に杖をとゞめ、自國の瀟湘ハコウに比して、愛觀せ

りとかや。(佐々木高行)

一八、勸學 (高崎正風)

あだにすごすな、	けふの日を、
今日は再び、	かへり來ず、
むだに暮らすな、	このとしを、
今年はまたも、	めぐり來ず。
たゞ時のまの、	日かげだに、
惜みし人も、	あるものを、
まなびの庭に、	つどふ子よ、

撓ウツまず摘めよ、

をしへ草。

一九、トマス、エヂソン

エヂソンは、近代の有名なる發明者の一人なり。彼は、西曆一千八百四十七年を以て、北米合衆國のオハイオ州に生れたり。父は、もと、和蘭人なるが、はやくよりに、こゝに來りて、裁縫、園藝等の職を營み、また、穀商をも營めり。性質、まことに、温厚にして、また、頗る、意志の強き人なりしが、如何せむ、家道、常に、意の如くならずして、はかなき生活をのみ送れり。されば、エヂソンは、

學校に入學することもかなはず、僅に、母に従ひて、讀書、算術の初歩を學び得たるのみなりき。されど、性、頗る、讀書を好みて、書物といはず、新聞といはず、手元にありしものは、すべて、根氣よく、これを讀み習ひしかば、その智識は、次第に、廣くなりぬ。

家道、ますます、衰へて、今は、その日の生活にすら、事かくやうになりしかば、彼は、自ら、世に出てて、その生活の道を求めざるべからざるに至りぬ。これ、彼の、僅に、十二歳に達せし時なりき。體格の強壯なるのみならず、その意志も、父の性をうけて、頗る、強固なる、この

少年は、今や、憤然として、自ら、その力を試みむと決心せり。

彼は、ある鐵道のボーイとなりぬ。その事務に忠實にして、志かも、敏捷なる、はやくも、他の、熟練したる同僚を凌ぎて、人々の注意をひくに至れり。かくて、暇ある時は、わが得たる賃銀をば、書物にかへて、熱心に、これを讀誦するを、この上もなき樂とせり。ある時、彼は、ある化學書を買ひ來り、常の如く、熱心に、これを讀めり。されど、その學理は、容易に解せらるべくもあらず。こゝに、彼は、書中の注意に従ひて、自ら、實驗に訴へむ

と、さまざまの困難を犯して、あやしげなる實驗室をば、その車中の、わが室内に設けたり。かくて、汽車の進行中は、そこに引きこもりて、その実験をつゞけぬ。後年、彼が、發明の偉業を大成せし素は、實に、この間に養はれたるものなりといふ。

企圖の才を具へ、且つ、萬能の知識を具へたる彼は、そこに、また、一の新計畫をなしぬ。そは、古き活字を買ひ、また、印刷の器械を買ひ來りて、短日月の間に、一新聞を發行したることなり。彼は、一人にして記者と印刷者とを兼ね、併せて、その販賣者たりしなり。かくて、

その新聞をば、汽車の乗客に賣り、その收入を以て、實驗室の整頓をはかれり。されど、不幸の出來事起りて、彼の苦心は、空しく、水泡に歸せり。ある日、燐の入りたる壘、ふと、棚より落ちて發火し、その近くにありし荷物に燃え移りぬ。すは火事よと、たち騒ぎしほどに、人も馳せ來りて、とかくして、もみ消したれば、大事に至らずしてやみたれど、これがために、多年の苦心になれる、彼の實驗室は、全く、うち壞されて、その形を止めざるに至れり。

その後、また、新聞の記事によりて、ある商人の怒を

買ひ、爲に、その新聞も、遂に、廢刊せり。かくの如く、さまざまの不幸は、一時に、彼の身邊に集り來りて、彼の志業も、一時、中絶せむとする傾向を示したりしが、彼は、これがために、少しも、撓むことなく、熱心に、その業務を勉勵し、その餘暇を以て、ひたすら、思を、研究にこらしたり。

ある日のことなりき。エヂソンは、鐵道の線路の傍に立ちたりしに、その前面に、一人の幼童ありて、線路に上りて、戯れ居たるを見たり。危険なりと思ふまもあらせず、かなたよりは、はや、列車の進み來れるあり

て、その間、僅に、數間に過ぎざりけり。かくと見るや、エヂソンは、奮然、身を躍らして、線路の中に入り、いそぎ、幼童を抱きあげたり。げに、危かりき。列車は、エヂソンの肩をすりて過ぎぬ。幼童は、辛うじて救はれぬ。そは、その驛長の愛子なりけり。驛長の喜、譬ふるに物なく、彼は、エヂソンを拔擢して、一躍、通信技師となせり。エヂソンの志業は、こゝには、はじめて、その緒に就きぬ。彼は、通信の職にありて、最も、注意して、電信の學理を研究し、その考察を進めたり。

これより、エヂソンの名、漸く、たかく、彼は、遂に、ニッ

ヨークの附近にわいて、一大實驗室を設立することを得たり。かくて、そこに種々の發明を大成したり。就中、その蓄音器、活動寫眞鏡の發明、及び電氣燈の改良等は、最も著名なるものにして、彼の名聲は、これによりて、全世界に響き渡れり。

二〇、少年時代の苦學

私の少年の時分は、世間一般に、遊惰で、姑息で、時勢がどうなるか、氣運がどうかはるか、更に、頓着せぬやうな有様であつた。ところが、私の藩に、多田立德とい

ふ人があつたが、漢學の出来る上に、時勢を觀ることが鋭く、さうして、世間の交際も廣く、はやく、長崎に往つて、高島秋帆に、西洋の砲術などを學んで來た人である。その人の話を、私が、十四五歳頃から、聽いて居つたが、聽けば聽くほど、世の中の事が、案じられてならない。どうしても、遊惰な、姑息な、寢入つて居るやうな世間を、はやく、警醒せねばならぬといふ考が起つてきた。

私が、志を決して、江戸に出て來たのは、十七歳の時であつた。その江戸に出て來た理由は、今までの様な

日本流の兵學をやつたり、砲術をやつてるやうなこ
とではいかない。江戸には、色々の先生のあるは、勿論、
西洋の兵學、砲術も、大に、開けて居るといふことであ
るから、それを學ばうといふのであつた。果せるかな、
江戸に來て、江戸の有様を見ると、日本の兵學、砲術で
は、駄目だといふことで、誰も誰も、西洋の兵學、砲術の
事ばかりいうて居る。そこで、彼の有名なる佐久間象
山先生のところに入門して、西洋の兵學、砲術を學び
かけて見た。ところが、國でやつて居つたやうなもの
ではない。江戸は、江戸だけあつて、物事が、皆、生き生き

して居つて、日々、學んで行く事が、めづらしくて、めづ
らしくて、たまらなかつた。

その後、都合あつて、一寸、國へ歸つたが、程なく、出て
來て聞けば、先生は、幕府から、嫌疑をうけて、信濃の自
分の藩に幽閉せられたといふ事であつたが、その時
の残念さは、實に、いふべからざるものであつた。され
ばとて、どうする事も出來ない。やむを得ず、他に、色々
な先生をたよつて、話を聞いたり、説を叩いたりして
居たが、そのうちに、西洋の兵學、砲術をやるには、西洋
の書物を讀まなければならぬ、翻譯書を讀んで居た

のでは、とても、埒があかぬといふことを考へた。かつ、この時は、亞米利加の使節が、浦賀に來た少し後のこととて、西洋の兵學、砲術をやらねばならぬといふ事が、一般に解つて來て、その學問が、急に、開けて來たから、私も、それを研究することに志した。さて、その時分の西洋學は、専ら、蘭學ばかりであつて、今日のやうに、英學、獨逸學、佛蘭西學といふやうなものを學ぶことが出來なかつた。そこで、その蘭學を學ぶには、誰に學ぶべきかといふに、大抵、醫者に學ぶのである。それは、醫術といふものが、早く開けて居つたものだから、蘭書を

讀む人といふものは、主に、醫者である。それ故に、何人も、西洋の學問をするには、醫者の世話にならなくてはならないといふ有様であつた。

私が、佐久間先生に就いて居たのは、二年ばかりに過ぎない。けれども、すこしでも、先生の薰陶を受けて居るから、益、原書を讀んで、西洋の事情を知りたいと思ふ心が盛になつて來て、それから、晝夜兼行で、力の及ぶだけ、勉強した。勉強というても、今の勉強の仕方とは、大に、その趣が變つて居た。今日は、小學から大學まで、學校に往つて勉強だにすれば、段々に、進んで

往くことが出来るのであるけれども、その時分は、洋學をやる學校といふものはない。唯、蘭學の出来る先生が、自分の私塾で、二十人か三十人かの書生を教へるといふに過ぎない。それも、廣い江戸の中に、五六箇所位しかなかつた。ことに、困つたのは、書物である。書物がすくない上に、價が、非常に高い。その頃の書生といふものは、とても、本を買ふといふやうな事が出来ない。そこで、皆が寫したのである。一冊の原書があると、それを、十人も二十人も三十人も、人が寫す。寫して、それを習ふといふ有様で、餘程、志の強い人か、又は、

才が十分利いて居る人でなければ、業を遂ぐる事が出来なかつた。

私が、六七年間、熱心に、學問して居る中に、幕府が、西洋風の學校を立てた。その學校は、蕃書取調所というたが、後には、開成所と改めた。それが、西洋風の學校の出来たはじめであつて、その時は、私は、二十五歳の時であつたが、その學校の教師の末席に加へられた。學校には、政府の力で買うたのであるから、大分、書物が多かつたゆゑ、それを借りて讀んだが、段々、讀んで居る中に、蘭學ばかりでは、いかないといふ事が解つて

來た。それから、私は、獨逸學を學ばうといふことに志した。然るに、當時、獨逸學をするものとしては、私の外に、同志の者二三人あるだけで、他に教ふる人も、習ふ人もない。僅に、和蘭語で對譯してある本で讀みはじめたが、餘程、苦しかつた。さて、それまでは、兵學をやるつもりであつたけれども、攘夷論の盛な時であつて、その方は、やる人も多くなつたから、それよりはと思つて、法律だの、政治だの、哲學だの、道德學だの、書物を讀むことに志した。考へて見ると、最初、志をたてたのは、多田立德といふ人の獎勵によつたこと、次に、各國の書

を讀む志を起したのは、佐久間先生の獎勵によつたこと、で、この二人、特に、佐久間先生の恩は、忘れようと思つても、忘るゝことが出來ない。(加藤弘之談話筆記)

二一、ブンゼンの逸事

ブンゼン氏は、獨逸の化學者にして、西曆一千八百九十九年、八十八歳の高齡にて歿せり。苟も、化學に志すものは、ブンゼンランプによりて、氏の名を記憶するならむ。左に、記さむとする二三の逸事は、ハイデルベルヒの實驗室に於いて、親しく、氏に教授を受けた

る一學士が、倫敦の化學新誌に、投書したるものより抄録せるなり。

傳ふるところによれば、ブンゼン氏の終生、獨身たりしは、契約したる結婚の日を忘れたるによれるなりとか。又、氏は、わのが着する上衣に心づかずして、他の上衣を重ねたる事もありきとか。氏の放心は、有名なる事なり。氏は、余が旅宿に隣れる料理店にきて、晝食するを例とせしが、ある年の春、小牛の肉と、アスパラガスとを命じたるまゝにて、また、食品をあらためず。數週間の後、料理人いできて、アス

パラガスは、季節はづれとなりて、注文に應ずる能はずと、いふを聞きて、はじめて、日々、同一の食事をなし居りしに、心づきたりとか。さて、更に、熟考の上、他の品を命ぜしが、これより、また、日々、同一の食事をなし、余が旅宿を轉ずるまでは、他の品に換へたることを聞かざりけり。

氏が、ハイデルベルヒの實驗室の規約中に、左の箇條あり。

- 一、瓦斯ランプを、徒に、點火しれくべからざる事。
- 二、有害なる瓦斯を發生する時には、必ず、通風室

を失ひ、又、すこし、聾となりしは、事實なり。又、或時、氏は、激烈なる爆發のため、地上に投げ出されて、氣絶せしが、蘇生して、始めて、發せしことばは、材料は、少しは、猶存し居るや」といふ一言なりきといふ。これ等の事實より、世にブンゼン氏は、一の眼、一の耳、一の肺を失へりといへり。ブンゼン氏の門よりは、多くの有名なる學者をいだせり。

一一一、ボアソナード氏を送る詞

余は、一日、朝早く、ボアソナード君を、永田町の家

居ルヲ
居ルヤ

訪ひたりしに、君は、例の如く、文机に倚りて、餘念なく、法條を起草し居られたるが、その顔色、衰へて、常ならずればえければ、病やある」と問ひしに、病は、かくこそとて、その足を示されたり。見れば、二つの脚、共に、水色になりて、腫れふとりたり。余は、なにゆゑに、靜に、養生し給はざるかと、問へば、司法大臣と約ありて、某の日までに、若干の箇條を起草し畢へざるべからず。この義務は、病によりて、背くこと能はず」と答へられたり。余、かつは、驚き、かつは、覺束なく思ひて、いそぎ、山田司法大臣の邸に至り、この由を告げけるに、司法大臣も、

ともに驚かれ、即ち秘書官をして、君を訪問せしめ、速に、轉地療養あらむことを勧められけり。君は、約束當事者の命を受けて、はじめて、心たきなく、田舎に轉養せられたり。余は、この時、家にかへり、ひそかに、嘆息して、いへらく、凡そ、つかさある人々にして、かくまでに、深き義務心に伴へる勉強を以て、いそしみたらむには、立法事業、并に、諸般の事の擧らざることやあるべきと。このこと、一小件なれども、余は、將來、ボアソナード君の名譽ある史傳中の一段とすべき價值ありと信ずるがために、別に臨みて、これを、公衆の前に述べ。

君の二十年間の立法上の功績のごときは、他の諸君の演述に譲りて、こゝにいはず。

余は、實に、ボアソナード君と二十年來の友なり。場合によりては、わが師なり。さるを、病のために、餞の席に臨むこと能はざるは、遺憾のきはみなり。今、書して、君の旅行の安全を祝し、あはせて、左の詞を以て、君を餞す。

「余は、君が、わが國を呼びて、第二の本國と、いへりしことを記憶す。余輩は、將來に、遠く、君を、海のあなたに慕ひ望むと同時に、君も、また、長く、第二の本國を忘れ

ざることを知る。ボアソナード君よ、君の第二の本國が、立法上及び諸般の事業に於て、いかに發達するかを見て、幸に、余輩のために、必用なる注意と勸告とを怠ることなかれ。(井上毅著 梧陰存稿)

二三、アラビア馬 その一

アラビアの地は、古來、駿馬の產地として、その名、高く、天下の逸物を出して、あまねく、世に珍重せらるゝは、誰も、よく、知るところなり。

今、つらつら、アラビア馬の今日ある所以を思ふに、

これ、決して、一朝一夕の故にあらず、又、單に、その地味風候にのみよれるにもあらで、數千年の久しき、終始一日の如く、孜々として、倦まざる、土人の丹精によりて、はじめて、こゝに至りしものなり。

アラビア人の、馬を相るや、その理想、頗る、高く、その選擇、また、頗る、嚴密なり。苟くも、わが理想とするところの標準に合はざれば、即ち、以て、わが產地の名を辱むるものとなし、ひたすら、その改良をはかりて、これがためには、寢食をさへ廢するにいたるといへり。こは、もとより、アラビア人の性情に出でたるにもよる

べけれど、その重なる原因は、この國に傳れる、一種の神話によれり。

太古、アラビア人の祖先、神にむかひて、乞うていはく、神よ、われに、一の精靈を與へ給へ。その精靈は、以て、われら獨占の名譽となすに足り、萬民の畏敬を受け、諸人に愛敬せられ、また、われらの敵を屈服するに足るべき資質を具へたるものならざるべからず」と。神は、この請を容れて、一匹の駿馬を下し給へり。かくて、その馬に向ひて、

われは、汝に、世界無比の美質を與へたり。いかなる

珍寶と雖も、汝の見むと欲するところのものは、直に、汝の眼中に浮ばむ。汝の蹄は、以て、汝の敵を蹂躪するに足り、汝の肩は、又、以て、汝の親友を負ふに足らむ。全世界の生物中、汝の如く幸福なるものは、他に、その比類なかるべし。

と、のたまひきとぞ。これ、その神話の梗概にして、アラビア人の固く、信ずるところのものなり。

されば、アラビア人は、常に思へり。馬は、たゞ、アラビア人の手にありてのみ、幸福なるを得べしと。故に、若し、他人の、來りて、馬を求むるものあれば、彼等は、實に、

その身命を賭して、これを争ふなり。ある地方にては、馬を、他國人に賣りたらむものは、律するに、死罪を以てすべし」といふ法律さへあり。彼等は、また、常に信ぜり。その國に生るべき馬は、すべて、駿良無比の性質を具備したるものならざるべからずと。こゝを以て、若し、少しにても、その缺點あらむか、彼等は、直に、これをわが飼育の道の足らざりし罪なりとなし、これをして、その眞正の發達をなさしむるにあらざれば、祖先に對しては、不孝の子となり、神に向ひては、また、不忠の臣となりて、その罪、決して、逃るべからざるものなりと思へり。

二四、アラビア馬その二

アラビアにては、馬は、常に、家族の一員として待遇せられ、その家長の、これを思ふ情は、實に、その子弟を思ふ情にことならず。馬も、又、よく、人に馴れて、その家族と親み、その兩者の關係、見るものをして、そゞろに、欣慕の念を禁ずること能はざらしむといふ。嘗て、一旅行者の、身親しく、アラビアの内地に入りて、牧馬の狀況を觀察したるものあり。その紀行中に、

余は、現に、一匹の牝馬の、幼童と共に、戯れ遊べる様を見しことあり。纔に、歩み得るばかりなる幼童の、牝馬の尾を引き、足を撫でて、これに戯れかゝれるに、馬は、さも楽しげなるれも、ちして、よく、幼童をいたはり、時に、口と足とを以て、その玩具をさゝげつゝありき。余は、この一事を見て、アラビア人と、その馬との關係の、決して、偶然にあらざるを知れりと、志るせり。

さて、生れて、十八箇月にして、馬の教育は、はじめて、開始せらる。はじめは、少年騎士の手に屬し、縦横に、原

野を奔馳するを以て、その日課とす。その二歳に達するに及びて、これに轡を加へ、また、鞍を置くを常とす。かくて、三歳に達すれば、その實力を試験し、次第に、その教育を進めて、七歳に至りて、全く、その完成の域に達す。又、彼の少年騎士も、この七年の間に、その乗馬の練習を終へて、完全なる騎士の地位に達するなり。されば、アラビアの諺に、「七年なるかな。七年なるかな。わが友も、われみづからも、皆、この七年間に成育す」といへり。そは、馬も人も、ともに、この七年の間に、その教育を終ふることをいへるなり。

よく、馴致せられたるアラビア馬の、よく、長途の騎行に堪ふるは、實に、驚くべきものあり。一騎士の、四五日間、うちつゞきて騎走し、毎日、三十餘里を走りたりなどいふは、珍しからぬことなり。かくて、一旦、危急の場合に遭遇する時は、飲むこともなく、食ふこともなくして、終日終夜疾走し、去かも、なほ、綽々として、餘裕ありとぞ。

アラビアにありては、馬は、ひとり、家畜として、かくべからざるのみならず、その土人の、戰場に出でて、勇名を博し、祭場に入りて、威嚴を保ち、集會に列して、盛

装を誇る等、皆、一に、その助によるなり。

勇士の戰場に出づるに當りてや、その家族は、たゞ、ひとへに、わが馬の無事ならむことを願へり。かくて、若し、その勇士の、馬を失うて、空しく、歸り來る時は、彼等は、頗る、その騎士を恨みて、深く、愛馬の不幸を悲み、快々として、樂まず、數月の間、悄然として、その喪に、服すといへり。

二五、 森林

西班牙、たよび、支那にては、森林を伐りつくして、山

に、一木をも見ざるところあり。かくの如き地は、往々、旱魃、うち續き、饑饉となりて、疫病、流行する事あるなり。近くは、我が國にても、福岡縣、和歌山縣などに、洪水起りて、田畑を埋め、家屋、人畜を流して、莫大の損害をうけたることあるも、皆、それがためなり。森林を伐りて、かくの如き害あるは、何故なるか。

山林は、高き處にありて、能く、雲を引く。去かして、山林は、溫度、低きものなるゆゑ、雲は、凝集して、雨となりて降るなり。然れども、樹木の枝葉茂りて、雨水を支ふるゆゑ、雨は、一時に、地上に降ることなし。かつ、また、山

林の地には、落葉あり、壙土あり、樹木の根ありて、水の一時に流出することなく、まづ、地中に入りて、徐に、谷川に落ち行けば、大雨の時にも、河川の暴漲すること、稀なり。然るに、今、山林の樹木を伐り拂ふ時は、小雨にても、忽ち、谷川に流れ満ちて、暴に、河川を漲溢せしむべし。况や、大雨の、急に、降り下るに於いてをや。

故に、山林は、雨水の調節機と稱せられて、大雨にても、洪水を起さしめず、大旱にても、河川を涸らすに至らずして、常に、河水の分量を同一ならしむるものなり。山に樹なきときは、雲、これに接するも、雨となるこ

と易からざれば、河水も涸るゝに至るべく、また、偶雨
となることあらば、一時に溢出して、田畑を滄海に變
ずるに至るべし。これ、その旱魃を招き、洪水を起す所
以なり。

森林は、雨水を調節するのみならず、又、溫度を調節
する力あり。すなはち、山林は、夏涼しく、冬暖なり。冬暖
なるは、その寒風を防ぐがためにして、夏涼しきは、樹
木が、溫熱を吸取すると、枝葉が陰翳をなすことによる
なり。

森林は、かくの如き効益の外に、猶、地方の風景を美

にするものなり。吾人は、山林を見るに慣れて、別に、そ
の美なるを感ぜざれども、樹木なき兀山を見るに及
びては、はじめて、樹林の美を覺ゆるに至るものなり。
人の喜びて、樹林の傍に居を構へ、魚の、よろこびて、樹
林の邊にあつまるも、これによるなり。その他、森林は、
木材を生じ、菌蕈を生ずるなど、その効用、擧ぐるに遑
あらず。

されば、森林は、人類のために、實に、大切なるものな
り。故に、吾人は、森林の害蟲を防ぎ、失火を警め、濫伐を
禁じ、大に、これを保護することに、注意せざるべから

ず。(横井時敬)

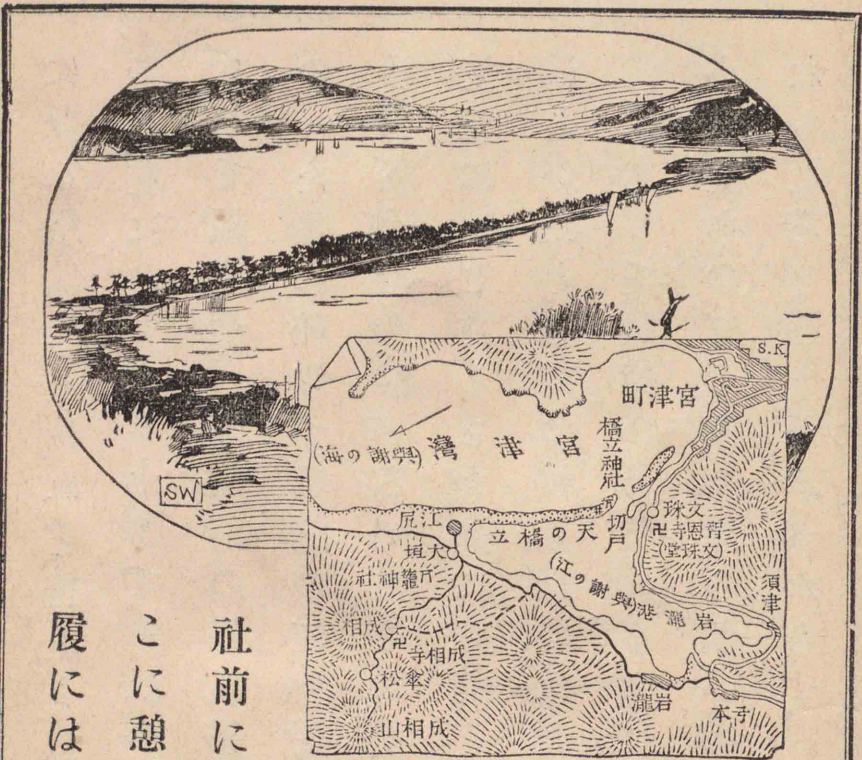
二六、天の橋立

天、やゝ曇りたれど、橋立一覽の念、勃々として、とゞめがたければ、小舟をやとひて、朝はやく、宮津の客舎を出でて、鏡の如くなる江上を、ゆらゆらと漕ぎ行く。舟は、小なれど、苦をかけ、毛氈を布きなどして、火入まで備へたれば、乗り心地、いとよし。濱邊に權をたて、網を乾したる様の、恰も、畫の如くなる漁村を、左にながめつゝ、漸く、松影の婆娑たる長洲に沿ひ、北に向つ

て進む。

舟子の語り出づる、さまざまの名所話に、耳を傾けつゝ、漕ぎ行く程に、やがて、籠神社の前につきぬ。

社前に茶店あり、去ばし、そこに憩ひて、下駄をば、藁草履にはきかへ、直に、成相山



に登る。路は、峻しけれど、苦しきほどにもあらず。右に折れ、左に曲り、上り上りて、傘松の下に至り、首をめぐらして顧望すれば、眼前の好風景、まことに、日本三景の一たるに恥ぢず。與謝の江、與謝の海をかぎれる白沙青松は、恰も、浮べるが如く、六里の翠色、遠く、萬頃の波光に映じたるさま、畫にも寫しがたく、筆にもあらはしがたし。岩瀧の村、芳野の山、九世の文珠堂は、近く、前にありて、黒崎の鼻は、遠く、左にあり。釣するあまの小舟、立ちのぼる賤が屋の烟、いづれも、皆、詩趣ありて、たもしるきこといふべからず。

さて、天の橋立股眼鏡とかいひて、こゝに登りて、眺望するものは、皆、かくして見るといへば、我も、をかしさを忍びて、全景に背を向け、身をかゝめ、頭を垂れて、股の間よりのぞき見れば、不思議や、今まで、淡く見えし景色、俄に、油畫の如く、パノラマの如くなりて、水のみすがた山のよそひ、一志ほ、その趣を添へ、水中に天あるかと疑へば、天上に水あるが如くにて、長橋の、その間に架せるありさま、まことに、蒼穹に立てる虹ともいふべく、また、海中に漂へる浮島ともいふべかりしなり。

成相山より下りて、ひとり、天橋の松の間を歩みて、橋立明神の所より、また、舟に上りぬ。こゝの松樹は、丈の長短、不揃vzにて、老いたるもあれば、また、さまで、大きからざるもあれど、下枝は、皆、よく揃ひて、海波に垂れたる景色、殊に、わもしろし。切戸といふ所に、智恩寺といふ寺あり。山門も、塔も、本堂も、建築、皆、古雅にしてゆかし。

かくて、それより、龍燈の松、涙が磯などいふ名所をば、横にながめつゝ、夕ぐれのほどに、また、宮津に歸りぬ。(幸田成行)

二七、 初旅 (中學唱歌)

知らぬところも、	見まほしく、
さりとして家も、	なつかしく、
こがひの鳥の、	かごいでて、
また飛びかへる、	こゝろかな、
花さく野べの、	わもしろさ、
波たつ海の、	わそろしさ、
わもひやりつゝ、	たちいでぬ、
見ねくる母を、	みかへりて、

訂正中等國語讀本卷一終

明治三十六年十一月廿四日訂正二十六版印刷
明治三十六年十一月廿七日訂正二十六版發行
明治三十七年十二月廿五日三十五版印刷發行

訂正中等國語讀本與附

定價表

十ヨリ各金貳拾六錢
十マテ各金貳拾六錢
附錄國文學史金參拾錢

明治三十六年十一月廿四日
訂正中等國語讀本與附

著作權登錄濟

著者 落合直文

東京市神田區錦町一丁目十番地

發行者 三樹一平

東京市神田區三河町二丁目十六番地

印刷者 鈴木友三郎

東京市神田區維子町三十四番地

印刷所 宮本印刷所

發行所 關西專賣

東京市神田區錦町一丁目
電話本局 二四三八番
大阪市東區備後町四丁目
特電話東 四三番

明治書院 岡平助

